

“絵の作者”旧日本兵はいまどこに？

佐原律夫さん

太平洋戦争で捕虜になり、ニュージーランドで負傷した旧日本兵が、献身的な看病をしてくれた尼僧に1枚の絵を贈りました。尼僧の遺族がその絵を手がかりに元日本兵を探し出し、再会したいという。国境を越えて、世代を超えて、橋渡し役を果たしたのが、長年ニュージーランドでロングステイを楽しむ佐原律夫さんです。

国境を越えて友好の輪

旧日本兵から贈られた絵の現在の持ち主は、ウエンディー・デイビスさん（修道院の尼僧だったドロシー・オールドリッチさんの姪に当たる）。デイビスさんは、ニュージーランドで開かれたテニスのシニア大会で知り合った佐原律夫さん夫婦に、絵の描き主探しを依頼しました。佐原さん夫妻は、スローライフを楽しんでいるため、世界各地でロングステイを楽しんでいます。なかでもニュージーランドはお気に入り。の国のひとつです。

2003年から何度もニュージーランドを訪ね、テニス、ゴルフ、ハイキングを楽しみ、元気なシニアカップルですが、昨年、ダニーデンで開催されたテニスのシニア大会で知り合ったデイビスさんから、絵の描き主である元日本兵が元気で暮らしているなら、お戻しして再会を果たしたいという依頼を受けました。

病室で描いた絵は、一見浮世絵風。しかし、よく見ると、右上にニュージーランドの国、左下に日本の国が描かれ、海の上に両国を繋ぐ橋が描かれています。婦人が日本からニュージーランドを振り返る構図になっています。絵を贈られたドロシーさんは、敵国の兵であつても同じ人間として献身的に看病したといえます。その感謝の気持ち



現地の電子版ニュースでも紹介

また、北海道在住の水野護さん（89歳）からは、「シスターにはどんなことがあつても生きていくことの大切さを教えていただきました」という感謝の手紙をいただきました。

このようにまで敬愛される尼僧ドロシー

はドロシーさんの家の窓に、いつも朝7時に朝刊を投げ入れるのを習慣にしていました。少年が新聞を投げ入れ、それをドロシーさんが窓辺で受け取る。5年間、毎朝、行われる健康チェックのような毎日だったようです。それが、1983年の



親切してくれたシスターに感謝の気持ちで旧日本兵が描いた絵

さんとはどのような人物なのでしょう。講演で語ったデイビスさんによれば、彼女は、思ひ出の絵を家の中で大切に飾っていたそうです。退職後は年老いた両親の面倒を見ながら、穏やかな日々を送っていました。彼女は新聞を購読していましたが、ニュージーランドでは新聞受けをつくる習慣がないため、新聞配達少年

ある朝、途絶えてしまいました。彼女の葬式には、彼女の死を惜しむ多くの人にまじって新聞少年の姿もあったそうです。また、ドロシーさんの日記には、少年のためにバイクを贈る計画が記されていたといえます。ウエンディーさんの夫アランさんは、シスターのエピソードを語ったあと、「オル



ロングステイ先でテニスを楽しむ（左から2番目が佐原さん）



佐原さんはシニア大会で優勝するほどの腕前



テニス仲間のデイビスさん夫婦から頼まれたのは…



高校生の熱意で日本を訪問したデイビスさんと



旧日本兵の仲間とは再会を果たしたが…

きはら・りつおさん
1942年岩手県生まれ。学生時代より卓球選手として活躍。損害保険会社勤務。40歳頃からテニスを習う。定年後、夫婦でロングステイ。世界各地のシニアテニス大会に出場。NZマスターズ大会、オーストラリアのマスターズ大会シニアの部では金メダルを獲得。オーストラリアのマスターズ大会ではプレゼンター（大会メダル贈呈者）にも推薦される。現在NZテニスクラブ所属。

がこの絵にあふれているように、佐原さんは感じました。

高校生の心を動かす

帰国後、新聞社などにもちかけたところ、その記事を目にした南山高校（名古屋）の生徒が仲間呼びかけ、デイビスさん夫妻を招いて講演をしてもらうことを計画。招待状を送ったところ、デイビスさんは快諾。日本とニュージーランド両国の親善の輪が、シニアからさらに若者へと広がったかたちです。

そればかりではありません。戦争を知らない今の日本の若者が、この出来事を通じて、太平洋戦争（太平洋戦争直前のアジアの状況、日本軍の侵攻、収容所での生活など）について、教科書では知ることのできない事柄についていろいろと積極的に学習しました。

絵の作者である旧日本兵は、まだ見つかっていませんが、同じ収容所にいた当時18歳の元日本兵の杉山良平さん（85歳）は「仲間を救ってくれた看護婦の遺族にお礼が言いたい」とデイビスさん夫妻の講演に駆けつけました。杉山さんのことは伝えられておらず、突然、花束を持って夫妻の前に現れた元日本兵のお礼のスピーチを耳にすることに、生徒たちの粋な演出に、思わず感涙。会場は、しばらく感動の渦に包まれました。

ドリッチ家の人々は、大きな夢と断固たる決意、敬虔な信仰を持って、安易に妥協せず、すべての人々に対して尊敬を持つように考え、敬意を持っていました。今の若いみなさんは、昔よりも複雑で厳しい競争の中にいるでしょう。しかし、広い心を持ち、夢に向かって邁進してください。そうすることで、よりよい世の中を作ることができるのです」とスピーチを締めくくりました。

現地でも思わぬ反響

このニュースは、ニュージーランドでも大きく取り上げられ、現地の人々を感動させただけでなく、現地に住む日本人をも勇気づけているそうです。

佐原律夫さんは、「当時の日本兵の方々の苦労やニュージーランドの人々の親切を思うと、私はごく当たり前のことをしただけです。思わぬ反響に驚いています。このような交流を通じて親善を深め、その国の文化、芸術、スポーツを学び、また日本の習慣等を教えて、お互いの立場を理解することで、平和に貢献できると考えています。今回もテニスの交流から始まったとても感動的な話となりました。クライストチャーチの日本人会でも日本とニュージーランドの親善と平和に貢献できた話題になっています」と語っています。